

続けた先に見えるもの

箱根駅伝を見るのが好きだ。今年で93回目を数え、いまや誰もがその名を知っているとんでもないほど有名な年始の駅伝大会。

実力校の快走、高速ランナーのごぼう抜き、シード権争いなどは、毎年見応え抜群だ。昨年と今年は、沿道へ行って声援を送った。

中央大学は昨年行われた予選会を突破できず、正月の本戦への出場を逃し、連続出場は87回で途切れてしまった。

それでも今年は、中央大学陸上部として唯一、堀尾謙介選手(経済学部2年)が関東学生連合の一員として2区を駆け抜けた。前を見据えて必死に走る姿が印象的だった。

大学として出場できなかったのは本当に残念ではあったが、87年もの間出場し続けてきたのは驚異的なことだと思う。

継続することが、どれだけ難しいか。楽しい場面ばかりならば問題はないが、たいいてい場合は物事を進めていく中で、困難や悩みに直面するから難しい。

私が大学生活で心掛けてきたのは、何事もひとまず続けてみるということである。授業、ゼミ、サークル、ボランティア活動、学生記者など。どれも、始めたからにはできるところまで続けると決めていた。

力の入れ具合やペース配分は時期によって調整したが、結果的に最後までそれらをやり通すことができたという自信を持っている。

続けてみたことで、得たことがある。初めはわからなかったことでも、こなしていくうちにだんだん見えてくることもある、ということだ。

学生記者もそうだ。始めたきっかけは、文章力を上げたいという熱意があったからだ。でも、文書を書くことの難しさを痛感した。文章の構成、語彙の選定、自分が思っていることをどう表現するか、など。これほど難しいとは

思わなかった。

私は何日も時間をかけて原稿を書き上げるが、毎日当たり前のように家に届く新聞の記者の方々は、それらの作業をとんでもない短い時間でこなしているのかと思うと、頭が下がる。これも、学生記者を続けてきたからこそ得られた感覚だと思う。

それでも、文章を書くということに関しては、活動を通して好きになることができた。文章を読んで、「よかったよ!」と、うれしい言葉を掛けてくれる人もいた。今後どこかの場面で、この経験が生きればいいと思う。

余談であるが、私は3月にフルマラソンに挑む。この原稿の締め切り後のレースのため、結果は分からないが、現在は15キロ走った程度で限界が来る。

基本的に運動が苦手で、体育の授業でスターになったことは全くない。本番でも、苦しくて心が折れそうになる場面が来るのだろう。それでも、完走した後の達成感と感動は何物にも変え難いものだという。それを得るために、コツコツ練習をしている。

大学卒業。学生生活の終わりという意味では、大きな節目を迎えたかもしれないが、人生の中でのほんの一部分に過ぎず、フルマラソンで例えれば、まだ10キロ地点にも達していないのかもしれない。

私の憧れであり大好きな4人組音楽グループ、「GReeeeN」のメンバーの一人が、ライブ中に観客に向けて発したメッセージがある。「それぞれの道を、自分自身が信じて突き進んで行って」。

どこまで続くかわからないが、先はまだ長い道。誰かにバトンタッチすることはできないけれど、背中を押してもらったり、励まし合ったりすることはできる。時にはペースダウンしてもいいと思う。でも勝負どころでは全速力で、この道を進んでいきたい。



今年の箱根駅伝2区を走った堀尾選手